

の文化を学んでいるという印象を受けた。筆者が2004年2月に訪問したウメオ市郊外の学校のスロイドの授業の様子を撮影した写真を掲げておく（前ページ参照）。

（注）

- (1) 熊野聡『ヴァイキングの経済学——略奪・贈与・交易』山川出版社、2003年
- (2) 「スウェーデンにおける1877年改革前後のスロイド学校の実態——オットー・サロモンの著書からみえてくるもの——」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』第52巻第2号、2006年3月、1頁-27頁。
- (3) 「オットー・サロモンによるスロイドのモデルシリーズの形成と発展」『日本産業教育学会紀要』第37巻第1号、2007年1月
- (4) 「オットー・サロモンのスロイド教育システムのテーゼ」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』第53巻第1号、2006年9月

(5) ストックホルム市のスロイド担当視学官であったハリー・アービッドソン氏への筆者による聞き取り。

(6) Sven Hartman “Lärare kunskap” s.104-105, 1994

(7) このような性格は、モデルシリーズの否定と関連して登場してきたことは興味深いことである。1962年のレーロプランには以下のように書かれている。「スロイドの授業は常によく計画されなければならないとしても、それはモデルシリーズと結びつけられてはならず、一人一人の条件にあったものにする必要がある。」（“Läroplan för grundskolan” s.329, 1962）

(8) Skolverket “Grundskolan kursplaner och betygsgränser 2000” s.91, 2000

(9) 新自由主義の考え方による教育改革によって1989年から中央集権的なコントロールが緩和され、学校にカリキュラム編成権が委譲され、到達目標への達成状況だけを学校教育局（skolverket）が管理するようになった。各教科の年間時間数の配分については実際には学校によって異なっている。

## 特集 工作教育の歩み

# 日本の工作教育を創った人々

和光学園 森 下 一 期

もう還暦を超えた私の場合、工作は子どものころの日常の営みでした。いつも、何かを作っていたように思います。地域の仲間とともに身近にある道具を見よう見まねで使って、遊び道具を作っていました。だから、工作を学校で教えてもらうという意識はなかったように思います。

でも、中学校のころ、鉛筆削りくずを入れる木の箱を図工の時間に作ったとき、隙

間がないようにし、砥の粉で目止めをし、塗料を塗って仕上げたときには、授業でこれを仕上げたという実感がありました。また、高校の工芸の時間に、生徒会の取り組みとして部室作りをしたとき、その作業を授業の一環にもらったときも、授業との関連を意識しました。

かつては子ども達にとって、工作は日常の営みでしたが、学校での授業の中に位置

づけられていたことから多くのことを学び、経験していたのです。現在では学校でしか体験出来ないかもしれません。その意味で、学校の工作教育は現代の子どもたちにとって不可欠なものです。その場で子どもたちはブラックボックス化された日常の生活では味わえない楽しさと喜びを実感しているのだと思います。

今現在は、がらくた教材の導入によって子どもたちの満足感はかなり減退させられているのではないよりもむしろ、今後改善していく可能性もあります。本当に子どもたちのものとなる工作教育としていくことを願い、本来工作教育がめざしたものが、この日本の中でどう展開されてきたかを振り返ってみたいと思います。

## 1. 日本の工業教育の父 手島精一

私は、日本の工作教育の祖は手島精一だと考えています。彼は、現在の東京工業大学のもとになった東京職工学校を創立した人ですが、1884（M17）年、イギリスの万国博覧会に出品物を携え出かけていき、ヨーロッパの地で資料を収集してきました。またその地の教育博物館に知見を得て、日本に最初の博物館を造りました。後の上野の科学博物館で、創設当時は「教育博物館」でした。手島は入手してきた資料を上野の図書館に納めましたので、私も、国会図書館で、手島の印のある書物を閲覧することができました。その中に、フランスなどですでに学校に導入されていた「手工教育」の文献が含まれていたのです。私は日本の工作教育の歴史を調べていましたので、手島が日本に持ち帰った書物を国会図書館で

手にして身震いを感じたものです。

この手島の努力もあって、1886（M19）年教育令の中で初めて「手工科」が加設科目として導入されました。加設科目とは、必修ではなく学校がその科目を設定出来るというものです。そこから、本格的な日本の工作教育が始まります。でもその頃は「手工」と呼んでいました。その手工科が加設科目となって、当時の文部省は後藤牧太と野尻精一をスウェーデン、ネースの手工教育講習会に派遣しました。この講習会を主催したのが横山さんの論稿に出てくるオットー・サロモンです。彼らは、帰国後テキストを作成したり、手工科教授法を講義をしたりしました。

手工科が加設科目となって、どれほど普及したのかも興味あるところです。一般の書物に、隆盛を極めた、と書かれていたのですが、根拠が示されていませんでした。実際はどうだったかに興味を持って調べたことがあります。当時行われていた勸業博覧会出品品目を見ると、手工品目とされているのは、わら細工や裁縫品です。そして多くは農業栽培品目です。当時の調査に、石川県での手工の普及が書かれていました。そこで、金沢の県庁を訪れ、当地の教育界雑誌を調べさせてもらいました。その結果は、手工科が隆盛を誇った石川県においても、主流は農業であり、手工的なものも本格的な木工などはごくわずかで、農業の副業的なわら細工などの工芸的なものでした。それも数年して下火になってしまいます。

## 2. 明治の才人 上原六四郎

新しい教科目が設置されても、すぐ授業

が始まるわけではありません。それを教える教師がいなければできないわけです。手工科の場合、小学校で教える教師を養成する尋常師範学校の男子生徒に必修となります。でもその師範学校で教える教師がいなければなりません。その手工科の教師の養成は最初は、東京職工学校（後の東京工業大学）で1987（M20）年から3カ年間夏休みに開いた講習会で行いました。木工、金工などの実技、理論とともに手工の教授法を教えました。教授法を担当したのは、上原六四郎です。上原は開成所でフランス語と物理学を学び、そのときは東京商業学校教諭（後の一橋大学）でしたが音楽取調掛となり、東京音楽学校（後の東京芸術大学）主事も務め、邦楽音階を初めて科学的に研究し「點譜」を創案して『俗楽旋律考』も著した音楽関係で著名な人です。

この時期に師範学校の手工科教員を養成したのは、高等師範学校の理化学科でしたが、実際に手工教授法が教えられたのは、先の後藤牧太が帰国した1890年（M23）年のことです。それも、手工科教員だけを養成したわけではありませんでした。そのためか、先の職工学校が東京工業学校となったときに、機械科特別生科が設けられ、師範学校の手工科教員の養成が行われました。そこに、上原、後藤が関わっています。

この段階となって、農業や地場工芸的な手工科とは一線を画した本格的な手工科が始まると言えると思います。上原が教授したのはスロイド手工を下敷きにしたフランスの手工教育をベースにしたものと考えられています。後藤はネースで学んできたものを伝えました。

しかし、本格的に日本の手工科の内容が固められていくのは、専門の手工科教員の養成機関が確立してからと言えるでしょう。それは、1899（M32）年に東京高等師範学校に手工専修科が設けられてからです。その初代の教授が上原六四郎で、助教授が岡山秀吉でした。その二人が文部省の命によって『小学校教師用 手工教科書』を1901（M34）年から全4巻を作成します。それが、しばらくは標準となったようです。

### 3. 上原の直系 岡山秀吉

岡山秀吉は1906（M39）年に函画手工専修科に改まったときに教授になりますが、1889（M22）年末から翌年4月まで上原六四郎が主事を務めていた高等商業学校附属商工徒弟講習所で手工を学びます。この講習所が東京工業学校に移管されることになったため、上原によって同校に新たに設置された機械科特別生科の第一期生に組み入れられます。途中休学しましたが、師範学校手工科教員免許状も取得し、地方の師範学校、工業徒弟学校を経て、上原に呼ばれて、東京高等師範学校にきます。手工の名を付けた唯一の尋常師範学校の教員養成の中心になっていきます。ただ、1908（M41）年東京美術学校に函画師範科が設けられ、そこでも手工科が教えられたようです。

この間に、尋常小学校でも手工科を設置出来るようになるとか、義務教育年限が6年に延長されるとか、手工科が高等小学校で農業などの選択必修になるなどの変化はありますが、必修にはなりません。そのため、不安定な状態が続きます。高等小学校で手工科が必修になるのは1926

(T15) 年のことです。

岡山は、手工科の普及に力を注ぎましたが、その力点は普通教育の教科として位置づけることでした。1909 (M42) 年発行の『手工科教材及教授法』でも目的として「手工は簡易なる物品を製作するの技能を得しめ、手と目を練習し、兼ねて物体に関する観念を正確ならしめ、審美の情及工作に対する趣味を長じ、勤労・自治等の習慣を養うをもって目的とす」とまとめています。そして、教材選択については、1. 製作品はなるべく多様なこと、2. 児童の心理的要求に合するもの、3. 児童の身体発達の程度に合する、4. 学術的及美術的要素に富めるもの、5. 郷土の職業に関係あるものに重きを置く、6. 製作品はなるべく模式的なものをあげてます。狭い職人的な技の教授ではないことを強調していると言えます。そして、1911 (M44) 年から2年間、アメリカ、ドイツ、フランスに留学し、欧米の手工教育を調査・体験をします。当時は児童中心の自由主義教育が世界的に広まっていた時期ですから、岡山はその空気と實際を吸収してきて、日本に伝えることとなります。1920 (T9) 年の『新手工科教材及教授法』になると、手工科教材の選択では、適するものとして、1. 創作力を養う、2. 技巧を錬磨する、3. 仕事に対し努力をなさしむる、4. 工業常識を養う、5. 実際生活、を掲げ、排列として、1. 製品相互の論理的关系を追い易より難に進むこと、2. 児童の心理的要求に合すこと、3. 論理的排列と心理的排列とを程よく調和せしむること、4. 児童の技巧的機能の発達に伴はしむること、5. 季節に関係あるものはこれに合わせしむること、

というように、より児童の主体的な取り組みを重視する視点を出しています。

#### 4. 阿部七五三吉と創作・模倣論争

この岡山の後を継いだのが阿部七五三吉ですが、阿部は東京師範学校手工専修科の第一期生です。退官するのは1935 (S10) 年ですから、手島は火付け役として別にしても、上原・岡山・阿部の直接的な系列で日本の手工教育がほぼ50年にわたって築き上げられてきたと言えます。

阿部は求める手工教育を「児童が生まれながらにもっている製作本能・創作本能を助長せしむるものであると同時に、働かせることによって人間は働かなければならぬものである。すべての文化は働くことによって成されたものである。すべての社会は働くことによって助け合い救われているものであるという、働くことの意味と、働くことの習慣とを養成する教育でありたいと信ずる」と書いています。子どもをないがしろにはしていませんが、教えるべきことを明確にしようとしていたようです。

その姿勢が、大正期の潮流となった自由主義教育と正面からぶつかることとなります。創作手工協会を興した石野隆と繰り広げた「創作と模倣」をめぐる論争は、現代でも起こりえる論争です(当時の有数の教育関係雑誌である『日本教育』『帝国教育』誌上で数ヶ月にわたってやりとりされました)。石野は当時、児童中心主義の自由画教育を推し進めた山本鼎の流れに共通し、芸術的な創作を追求していたように思います。私は確認出来ていませんが、石野は東京美術学校図画師範科の出身ということで、



大正期後半になって、東京高等師範学校の流れとは異なるものが力を持ってきたように思われます。高師でも図画手工専修科だったわけですから、その後図画と手工の関連が強まり、戦時期に工的な面の重視は謳われ、工作科と名称も変わりましたが、芸能科の一つにくられ、戦後も図画工作科とされて、独立した工作科の位置づけはなされていません。

戦後の図画工作科についての検討をする



余裕はありませんが、阿部以降は、土原以来の流れの手工は多様なものとなり、人物で代表されるようなものではなくなったように思います。ただ、大正期に行われた論争を経て、教材は格段に幅を広げ、豊かになったように思います。

1929 (S4) 年の『手工指導講座』に収録されている以前にはなかった子どもの興味を引く玩具の教材を一部紹介しておきます。

特集 工作教育の歩み

## 工作教育の意味を考える

和光鶴川小学校の「工作技術」

和光鶴川小学校 成田 寛

### 「学力」論議と「ものづくりの活動」

安倍内閣の発足とともに教育をめぐる論議が盛んになりました。その中で気になるのは教育の前に常に「再生」という言葉つきの論議がされること。いくつかの国際的な学力調査の結果から、日本は「学力が低下している」となり、上からの（今は文科

省より力を持っているらしい「再生会議」とやらが案を作っているので“斜め上”と言った方がいいかもしれません）押し付けが急激に強化されました。今の一連の動きをわかりやすく言うと“学校5日制が、総合的な学習が、教師の指導力が、家庭的な学習が、教育基本法が、いけないから学力